



IMAGE by PPK
Written by Doujimayu

毒虫3

ホテルの中庭にある十以上のコースがある大きなプールは夜も開放されていて、私たちはナイトスイミングを毎晩楽しむことができた。初日は大きな満月の夜で、まるで天から祝福されているような気分。私は現地で買ったスカイブル―の少し大人っぽいビキニを着て、暗い水の中に足をいれる。水は予想通り暖かく、南国の官能的な夜の始まりを予感させる。

「ついに来たね、パパ」とプールの隅で私は毒虫の薄いがしつかり筋肉のついた固い胸に後頭部をくつつけて、空を見上げながら言った。

「ついにな」といった毒虫も真面目な声だった。さすがの毒虫も少し緊張しているのかと、思わず後ろを振り返る。でも数秒後には奴は私の耳たぶを撫でて、うなじに口づけをしてきた。相変わらずいつもの毒虫だった。私は目を閉じて毒虫の愛撫に身をゆだねながら、満月や星を見上げていた。白い月はぐにやりとして、水の上にも浮かんでいる。

夜のプールの水中照明というのはなんて素敵なんだろうとこの時初めて思った。まるでブル

「サファイアを詰めた宝石箱のなかにいるみたい。私と毒虫の身体は青い光に包まれている。または数万の青い夜光虫が私たちを囲んでいるみたい。赤ん坊が羊水のなかで見る夢がこのように、ゴージャスで荘厳であればどんなに素敵だろう。せめて生まれ出るまでは、綺麗なものを見ていたいものだ。生まれたら嫌でも沢山汚いものを見ることになるんだから……」。

「夜のプールってすごいんだね」と毒虫を仰ぎみていった。やつの尖ったセクシーな顎には水滴が光っている。なかなか綺麗なシルエットだ。

「今頃気付いた？」と毒虫は水中で私のブラの上から胸を軽く撫でながら言った。私はなんとかそれを払いのけようとするがうまくいかない。

「綺麗なのは前から気付いていたの。それを口にしたのが今なの」といいながら、私は毒虫の人差し指がいつのまにか私の乳首を刺激しているのに気付き、やつの手を抑えようとした。しかし、水中で素早い小魚のようにそれは逃げ回る。

「昔……温泉でエッチしたね」と私は激しく抗議するかわりに甘えた声でそう言っている自分

にちよつと驚いてしまった。快樂が直接私の口を操っているみたいだ。星と月に見られて、私は目を潤ませている。口が唾液で一杯になる。「能登の旅館だったな」と毒虫は私の耳たぶに口をつけて甘く囁く。

「漁船のランプの光が揺れていて、すごい、綺麗だったね」と私は懐かしくも甘美な光景を思い返す。あれが初めての家族旅行だったんだ

（温泉でエッチしてどこが家族旅行だか……）。

それは海の水や温泉の水に包まれた記憶だった。そして私たちはマレーシアで過ごす最初の夜をまたこうして水の中でむかえている。水は相手に合わせていろいろな形になる。毒虫が父親の顔をすれば、私は娘になるし、彼が教師の顔をすれば、私は勤勉な生徒に変身する。そして毒虫が男として振舞えば私は、小型ながらもヤツを満足させる雌に変貌する。水のように決まった形をもたず私は毒虫にあわせて生きている。それしか生き方を知らないから……。

「ああ、甲斐は水のなかにいると性的興奮が高まるタイプだよな、風呂の中であの時何度も求めてきた」と毒虫はわざとエッチなことを言っ

て私をいじめる。いつもの手だ。

「そんなことはない」と私は即座に否定する。でもその声はそれほど強くはない。

「指入れてほしいのか」と毒虫は信じられないことを平気で提案する。

「い・ら・な・い……それに」と私は毒虫を出るだけ怖い顔で睨んで言った。

「それに何だよ、甲斐」と毒虫は禅僧みたいな清らかな表情で無心に尋ねてくる（禅僧見たことないけどね）

「何か変なことすれば誰かに気付かれるよ」と私は辺りを慎重に見渡しながら言った。プールはもちろん貸し切りじゃないから、普通に親子連れやカップルが周りでお行儀よく泳いでいる。

「声を出さなきゃいい」と毒虫は素っ気無く言った。

「出たらどうするんだよ、ていうか声出るよ。

普通」と少しキレかかりながら私は言った。日本語だから周りの人は理解できないので助かる。

「大丈夫、みんな泳ぐのに夢中だよ」と涼しい声で言われた。

「そ、そんなわけないでしょ」と言ってるうちに毒虫は優しくビキニの上からあそこを撫で始

める。なんで不埒な義父なのだろう。

「もう、分かったから、ごめん、ごめん」と私は慌てて毒虫に哀れみを請いながら言った。羞恥心が私に毒虫と冷静な取引をさせようとした。すなわちひたすら下手にでる作戦。

「何がわかったんだよ」とサディスティックな笑みを浮かべて毒虫が微笑む。相変わらず不埒な奴の指が私の股間の最も敏感な肉の突起物のすぐ上を優雅に踊る。そのステップにあわせて私は水の中でお尻をイヤイヤするように揺らす。

「わ、私は水の中だと、エッチになる人です。認めます。だからやめて。後で、ね、二人になったら部屋で続きをしようよ」となるべく冷静に言っただつもりだ。まるで性欲に暴走する年下の恋人を宥めるように懇願しながら。

「ここでやるほうが興奮するだろう」と言って毒虫はあろうことかビキニのパンティーの隙間から強引に指を入れてきた。

「馬鹿、ほんとやばいからやめろよ」と私は怒って鋭い声をあげる。近くで泳いでいた男の子が不思議そうに私たちを見ていて、それに気付いて恥ずかしさで、頭がぼーっとなる。

「うわ、又ル又ルだよ、甲斐ちゃん」と毒虫が

からかうように言った。全く懲りない男。

「もう、許して、誰かに気付かれたらもうおしまいだよ」と言った私の声はもう涙声だったのかもしれない。

「わかったわかった」そういって毒虫は私の額に優しくキスをして解放してくれた。さすがに毒虫も娘を泣かせるのは悪いと思ったのだろう。

「ええ、どうしたの、この薔薇」とプールで冷えた身体をホテルの大きなバスタオルで包んで部屋に戻ってみて私は叫ぶ。何故って部屋の外についているジャグジーにいくと、そこには深紅や薄紅色、紫に近い色、黄色の美しい薔薇がお湯にいったいに浮かんでいたからだ。

「特別にホテルに注文したんだよ、いかにもホストらしい臭い演出だけだな」と毒虫は恥ずかしそうに言った。星空と満月と薔薇一杯のジャグジー。なんて乙女チックで、ホスト的で馬鹿馬鹿しく豪華な演出なんだろう。でも悪くない。

何がいいって、一番良かったのは毒虫のその恥ずかしそうな笑顔だ。こういうときに自慢気な表情など絶対しないのが毒虫の奥ゆかしさだ。

私はそういうところに何故か欲情するような女の子に育ってしまった。

「いいよ、パパ、ちよつとホスト的だけど、最高の夜だよ」と私は毒虫の胸に抱きついて満面の笑みを浮かべて叫んだ。

「そうか、これはお前のマレーシア上陸記念だよ」と毒虫は言つて、私を前から抱きしめて額や頬、唇に滅茶苦茶キスしてくる。私は満月の下で、ひたすら毒虫の少しビールの匂いがする舌に躊躇いも恥じらいも無くしゃぶり付いていた。まるでお腹をすかした赤ん坊が母親の乳首にしゃぶりつくみたい。私たちはお互いの舌を味わっていた。ジャグジーの蒸気と薔薇のいい香りが混ざり合つて夜の空に溶けていく。それはむせかえるくらいの官能だった。

「ああ、薔薇はやっぱり乙女を酔わせるねえ」と私は薔薇の浮かんだ水をチャプチャプとたたきながら子供のようになつて笑ってしまった。

「お約束のやつするか」と毒虫は、目の前に浮かんでいる白い薔薇を水から掬い上げて私の髪に載せた。鏡があつたら見てみたかったが、部屋に戻らないと見られないので諦めた。

「ねえ、可愛い」と私は白痴のようにヤツに訊ねる。

「童話に出てくる姫君みたいだよ。∴∴薔薇の香りで永遠の眠りにつく姫君」と毒虫が臭い台詞を堂々と吐く。さすがは元腐れホストだ。

「それで王子のキスで目覚めるの」と私はもう一つの黄色い薔薇を自分で反対側の耳に挟んで聞いた。

「それもありきたりな筋だなあ」と毒虫は星空に目を向けて目を閉じて考え込む。新しい毒虫プロットを考案しているのだろうか。

「じゃあ、パパの童話じゃあ、どうやって姫は目覚めるのさ」と私はヤツに聞いてみた。

「こうやって抱きしめて、ひたすら頭をなでられて目覚めるのはどうかな」と毒虫は右手で私の上半身を強く抱きしめて、左手で私の頭を優しく撫で始めた。

「∴∴うーん、き、気持ちいいけど、口付けのほうが普通にロマンチックだよね」と私は苦笑して言った。

「だな」と言って、毒虫が私に軽くキスをする。私の視界には満月の掬揄するような白い光が飛び込む。やっぱり外で薔薇の香りに包まれたジヤグジーに入るのは素敵すぎる。

「こうやって、お客とか昔の恋人にも薔薇のお風呂やってあげたんでしよう」と私はわざとぶち壊すようなことを言ってみた。あまりにも幸福すぎて、薔薇の匂いが妖し過ぎて、何かそういうのをすこし冷ましたかったからだ。

「ババアたちには菊の花だよ、薔薇なんて恥ずかしいことしたのはお前が初めてだよ」と毒虫は羞恥で照れながら上品に微笑む。私はまたその笑顔にまたイキソウニなってしまう。

「本当かなあ、パパ」と私は月光に照らされた毒虫の笑顔を惚れ惚れと見上げながら、少し不信感を声に混ぜて呟いた。

「信じる者は救われる、陳腐だけれど賢者の言葉だよな」と毒虫は言って、当たり前のように私の背中のビキニのヒモを解こうとする。

「ちよつと、誰かに見られちゃうでしょう」と私は、薔薇の匂いで麻痺した頭を必死に覚醒させて、毒虫に抗議した。

「大丈夫、大丈夫、真っ暗で遠くから見えないって」と毒虫は私の鎖骨に舌を這わせながら、ゆっくりとブラの紐を解いていった。

「あ、もうエッチ時間始まったの」と私は淫らかな興奮で目を細めながら呟いた。

「とつくに始まっているよ」当たり前だろ、という表情で毒虫は、私のビキニのブラをあっさり剥ぎ取り、細い舌でいつものように右側の乳首から舐め始めた（乳房を舐める順番は几帳面に守る変な毒虫だ）。

「また、おっぱい大きくなったんじゃないかと毒虫はまじまじと私の胸部にある豊かな双丘を眺めながら呟く。

「パパにいつも揉まれているからね」と私は嫌味を言っただけだった。

「頭も乳房も刺激が、一番の栄養なんだな」と毒虫は言っただけで、真ん中に亀裂のはいた白い薔薇を私の乳首に帽子を被せるように軽々と引っ掛けた。

「こうすると何かの可愛いオブジェみたいだな」と毒虫がほざく。

「人のおっぱいで遊ばないでよね」と私は苦笑して言った。大人の男を簡単に子供にしてしまう女性の乳房は、私たちから見るとただの脂肪の塊なのになんとまあ不思議な効力をもっているのだろう。毒虫は薔薇の花弁に彩られた私の薄紅色の突起をいつもより熱心に時間をかけて舌で転がすのだった。

「ああ、う、うう、く……も、もう何百回も舐められているのに、こんなに気持ちいいって変だよな」と私は不思議に思って毒虫に言った。

「お前の快樂に歪む白い顔が、俺にいつも生きる意味を思いださせる」と毒虫は妖しく笑って、今度は私のビキニのパンティの紐に手をかけた。あつさりと私の陰毛が露出して海草の一種か何かのように水面近くに淫らに拡散していく。

「も、もう、欲しいよ」と私は毒虫に言った。「お前のその顔みりやあ、わかるよ」と毒虫は慈愛溢れる笑顔で言っ、私をジャグジーの外側に向けて立たせて、ゆっくりと後ろから挿入してきた。水面すれすれに並べられた乳房を後ろから毒虫に揉まれながら、ヤツの毒針が下腹部に埋め込まれていく。

「ああ、か、固い」と私は思わず、声をあげる。「ゴムつけてないけど、最後は外でだすからな」と毒虫は耳元で囁く。

「もう、どうでもいいってそんなこと」と私は真っ暗なガラス窓に写る星の光を見つめながら、眉間に皺を寄せて答えた。どんなに出産の痛みが苦しくても、男に裏切られるのが悲惨でも、性病が恐ろしくてもこの快樂がある限りは、雌

はこうやって雄に屈服するものなのだろうか。
何万年も何百万年も前から、こうして男と女は
交わって生命を繋いできたのだ。

「甲斐、巨乳なのに相変わらず少年みたいな小
さい尻だな、そのアンバランスさがお前の魅力
だよ」といいながら毒虫が私の腰を宝物を扱う
ように優しく丁寧に撫でる。そしてその律動は
どんどん激しくなっていく。毒虫の腰の動きに
合わせて、水がチャプチャプと音を立てるのが
とてつもなくエロチックだった。

「はあ、はあ、いい、ああ」

「どんどん、収縮していく、いつもよりきつい
な」と毒虫はまた私の乳房を後ろから乱暴にま
さぐる。乳首に付着していた白い薔薇はいつの
まにか剥がれ落ちて、ジャグジーの泡の中にく
るくると廻って水の下に飲み込まれていった。
それはまるで、毒虫の操る糸にマリオネットの
ように運命を委ねている私の行く末を予感させ
て恐ろしい。

「うん、ああ、もっともっと強く、ああ、いい、
いいよ」と私はどこまでも堕ちていくことを、
むしろ望みながら懸命に毒虫の動きに合わせて
自分でも腰を振っていた。あまりにも私の声が

大きくて毒虫が私の口を手で軽く覆った。

「ふぐ、む、むむむ」と私のもらす声はとたんに不鮮明になる。

「甲斐ちゃん、とても淫らだよ」といつて毒虫は子宮に届けとばかりに固い毒針を更にずぶりと私の深部に押し入れていった。

「ふぐ、むむ、あぐうう。むむ」と私は家畜のようにくぐもった声をあげながら汗をかく。毒虫のもたらす快樂に震えるような喜びを感じながら、星と月の光に照らされて白く光る未熟な裸身を揺らし続けた。